

大正九年・十年の赤彦

宮川 康 雄

大正九年三月号の編集を最後に『信濃教育』の編集主任の職を退いた赤彦は、六月第三歌集『氷魚』を上刊すると籠城主義的な態度をもって作歌と万葉集の研究を中心とする仕事に打ち込もうとした。この頃から『アララギ』の「編輯所便」にも歌壇関係の記事が少なくなり赤彦の心が内嚮しはじめたことを示していると、斎藤茂吉も『アララギ二十五年史』(昭和八)で指摘している。赤彦の閉鎖的な態度は他派のきびしい批判を招いたけれども、内からの強い要求にもとづいて生涯の仕事にとりかかろうとし、歌壇との交渉を最小限にとどめることにしたのであったから、赤彦は、これに応酬したりまたはことさらに弁明したりすることを敢てしなかった。大正九年は太田水穂が芭蕉研究会を興すなど、歌人のなかにも芭蕉への関心が高まってきた年である。芭蕉を慕う気持は赤彦も他の歌人に劣らうとは思っていなかった。むしろ自分を芭蕉の真の理解者であると自認していたであろう。籠城主義的な態度をとったのも、あるいは、自分も風雅の道一筋に生きた芭蕉と同じ道を歩もうと願ったからであるかも知れない。

しかし赤彦は、ただ自分の殻に閉じ籠らうとしていたのではなかった。自分の成長に益すると考える意見に接したときには、謙虚な

気持で耳を傾けようとしていた。たとえば、『アララギ』の五月号には、小宮豊隆・寺田藪柑子(寅彦)・田辺元の寄稿がみられるが、赤彦は、このなかで哲学者の田辺元が、『アララギ』の写生主義について論評し、それは他派の人びとのいうように謬説というべきものではなく、むしろ芸術の本道を説くものであるとして積極的に肯定、論述しているのを読むと、大いに喜び、元の手紙を送って、「人生の一片が現れ居らねば写生と思ひ居らざる小生の信念は感謝して貴説を了得するを覚え候只左様な信念未だ具体的に深きを致さず歌に現るるものはいくらも此信念を實現し得ず斯の時貴示の如き御意見を得候事は衷心より感謝の情に不堪候」(大正九・四・一八)と感謝の気持をあらわし、また、「小生等の歌に対し斯く迄御注視下され候事を知り忝く且つ恐縮の感深く候何卒今後も御感想等候はゞ少しも御遠慮なく御洩し下され候様祈上候猶此上は小生等の歌につき具体的に御意見御示し下され候はゞ如何計り喜しく左候」(同上続き)と、具体的な作品についての批評を乞うている。

芥川龍之介が『短歌雑誌』の六・七月合併号に寄稿した「短歌雑感」で『アララギ』に好意的な意見を表明しているのを目にしたときにも同様であった。龍之介が『アララギ』に対して批判的な立場をとっていた生活派の歌を「平俗な心もち」を歌っているものとして排し、斎藤茂吉と『アララギ』の歌を目して生活派の歌の域を出

て新たな境地を切拓いたものとして高く評価し、「現代の歌は斎藤茂吉氏以後、或は『アララギ』派の擡頭以後、殆面目を一新したやうである。その関係は丁度文壇が、武者小路氏或は白樺派の恩恵を蒙ったのと大差ないらしい。」といい、「遠慮なく云ふと斎藤氏或は『アララギ』派の歌壇に与へた影響は、武者小路氏或は白樺派の文壇に与へた影響より一層大きくはないかと思ふ。」と賞讃したのに対して赤彦は感謝の手紙を送り、『氷魚』を一部呈して、もし心付いた点があったら「御高示」を得たいと記している（大正九・七・一九）。

籠城主義的な態度を固く持しながらもみずからの研鑽を怠ることがなかつたものの、しかし、赤彦は、念願としていた作歌と万葉集の研究―主として作品の注釈と鑑賞―とに打ち込むという当初目的としていた生活に入ることを容易に実現することができなかった。

生涯の仕事を遂げるためには負担の重い『信濃教育』の編集主任の職を離れる必要があると考へて退職したのであったが、後任に適任者が得られないため、なおしばらくの間は、編集委員の一人として同誌の編集に多少の關係をもたなくてはならないことになった。

その後は『氷魚』の刊行に關する仕事でいそがしく、五月から六月にかけては病気で二十日ほども臥床している。この間に長崎医学専門学校教授として長崎に赴任していた斎藤茂吉が肺結核で咯血、六月下旬に県立長崎病院に入院したので、病氣が回復すると赤彦は長崎に赴き、退院して自宅に療養中の茂吉を見舞い、島原半島の雲仙温泉への転地療養に同道し、帰途西宮に中村憲吉を訪問して帰京した。この旅自体は七月下旬約十日ほどのものであったが、前後に平福百穂や古泉千樫と茂吉の病氣について相談したり斎藤家と連絡をとったりしているので、相当の日数を費した。

赤彦が繁忙から解放されいくらか落付くことができるようになった

たのは、八月の終り頃になつてのことであつた。本格的に万葉集の研究にとりかかることにし、諏訪の自宅から東京の發行所に留守を守っている高木今衛に宛てて、「○万葉集古写本考（佐々木氏著）が竹柏会發行になつてゐる夫れが有るか無いか往復ハガキで竹柏会へ問合せてくれ給へ柄も聞いてくれ給へ○木村正辞の万葉集文字辨證訓義辨證字音辨證はいつか君から買つてもらつたと思ふあれを小生へ売つてくれ給へ悪しくは貸してくれ給へ厄介でも小包で送つてくれ給へ」（大正九・九・二 高木今衛宛書簡）と依頼したり、また、「万葉古義の（長短歌だけ）について「閑」の字「閃」の字何字用ひありや（二十巻中）御ひま／＼に少しづつ御心掛下され度願上候竹尾君に少し分けて手伝つて頂けば猶よし閃（多く閃の仮字に用ひたるべし）の字は或はないかと思ふ」（大正九・九・七 高木今衛宛書簡）と調査を頼んだりしている。

しかし赤彦は、漸く着手することのできたこの仕事も長く続けることができなかつた。というのは、『アララギ』十二月号の「編輯所便」に、「今年アララギ会員の増加未曾有に有之、」と赤彦が記しているとおりに、『アララギ』への入会希望者が続出、会員が予想を上まわるテンポで増加しはじめたからである。会員の増加は、『氷魚』を刊行したことにより赤彦の知名度が高まつたことともある程度關係があるであろう。ともかくこうなると、会員の急増という新しい事態に対処することが先決問題となつた。

各地に会員の集まりもでき、万葉集の講義に招請され、指導を兼ねて歌会に參会してほしいとの要請を受けることも多くなつた。それらの要請を断ることは、もとよりできなかった。八月十六日には諏訪郡の泉野小学校に、また九月下旬には下水内郡の飯山町に赴いて万葉集を講じた。この講義にかけけることは、会員との交流をは

かるためばかりではなく、『信濃教育』の編集主任として得ていた収入を失った赤彦としては、その欠けた分の収入を多少なりと補うという意味においても必要であったと思われる。「小生廿三日より廿六日迄又々飯山町にて万葉講義可仕夫れより家に居り専心万葉講義（起稿中のもの）に取りかゝり可申候」（大正九・九・二〇）加納巳三郎宛書簡と記しているように、このために筆が中断したのもやむをえないことであった。

一方、この頃は家庭内にも新しい問題がおこってきていた。養父の政信の心身の衰えが一段と目立つようになってきた。出京して発行所にいるときも赤彦は養父の身が気にかかっていたらしく、妻の不二子に宛てて、「父上老後楽しみ少なし写真など出して御覧になる御心を察すべし出来るだけ慰めまつるべし小生近頃少しづつ心付くなり明日面会日これから大車輪にてはたらく染物や買物引受く御心配なし子供等その他万端御心付き下され度し」（大正九・一〇・一六）久保田不二子宛書簡と注意を促している。また、生家にも地所の処分問題があり、実弟の章穂に宛てて「地所の事容易にこちらより口を切るべからずいよ／＼手離す段になれば飯田保太郎氏を頼んでやるからそのつもりにせよ云々」（大正九・一一・一二）塚原章穂宛書簡と指示を与えた書簡ものこされている。

こうして『氷魚』刊行後の赤彦は、作歌の方面においてもみるべき作品をのこすことができなかつた。たとえばこの年、

冬空の日の脚いたくかたよりて我が草家の窓にとどかず

冬ふけて久しとおもふ日の脚は土蔵のうへへ高くのぼらず

日かげ土かたく凍れる庭の上を風走りて土蔵に入りたり

（冬の日）

冬の日の光とほれる池の底に泥をかうむりて動かぬうろくづ
土荒れて石ころおほきこの村の坂にむかひて入る日はやき

（氷湖一）

ここに於て坂の下なる湖の氷うづめて雪積りをり

みづりみの氷に立てる人の声坂のうへまで響きて聞ゆ

この冬は母亡くなりて用少なし心さびしと妻のいふなる

この村につひにかへり住む時あらむ立ちつつぞ見る氷れる湖を

（氷湖二）

山の田の清水に魚を放ち来し子どもの足は泥にこごえつ

（氷湖三）

つぎつぎに氷をやぶる沖つ波濁りをあげてひろがりてあり

のような秀作を発表しているけれども、「冬の日」は『アララギ』の三月号に、「氷湖」は六月号に発表して『氷魚』に収録した連作であり、『氷魚』刊行以後のものには高く評価しうる作品がないのである。「長崎」「金華山」「巖温泉」（原題「斐科山の湯」）などは、大正九年作として『太虚集』に収められているけれどもこれらを実際に発表されたのはいずれも翌大正十年のことであった。赤彦は作品のモチーフを九年中にえていたとしても、それを作品にまで仕上げるいとまをもちえなかつたのである。

長女の初瀬の結婚式が行われた十一月は、従来に増して繁忙のうち過ぎさなくてはならなかつた。初瀬の嫁ぎさは養母ぬゑの夫家四賀村小松家の親戚にあたる岡谷の林家で、縁続きの気安さもあるって式はごく簡単にと話合っていたが、土地柄しきたりが多く、下相談のようにには運ばなかつた。はじめの子供の結婚式で不馴れなこともあって赤彦は式の準備にかなりの日数を費すことになった。

万葉集の注釈の仕事がこのため停滞したのも余儀ないことで、仕事の進み工合を気にしながら赤彦は、「小生万葉に従事の日少なく漸く昨日より三四枚書きしのみ候こんな事では仕方なく候二十四日娘を嫁入らせてしまへば少し楽になり可申今年中に少し余計書き度存居り候」(大正九・一一・七 宇野喜代之介宛書簡)とか、「長女が二十四日に岡谷へ嫁に行くので二三ヶ月前より忙しく今月も十一日上京して明日帰国せねばならぬ来月は早くより上京して久しくあるつもりその折ゆつくり書く」(大正九・一一・二五 土田耕平宛書簡)とかと記し、無事に式が済んで仕事を早くすめることが可能になるとを期待している。しかし式がおわると、「少々無理な事に頭を使ひしためか年来かつて知らざる胃痛を起し頭も少々疲れ数日来弱り候処今日は痛み退き此模様にては大丈夫と思ひ居り候酒飲むことも殆どせざりしに遂やられ申候子を心配する事の深きものなるを覚り申候」(大正九・一一・一 平福百穂宛書簡)という状態になり、「あれこれにて今月は万葉の方全然手が付けられず貴下にも自分にも心苦しき心地頻りに候予定にては廿四日式を済ませ廿六日より五日間位手を付け得るつもりなりしに今日已に三十日ゆゑ全く一日も手を付けざりし事になり心苦しく存候」(同上)と、万葉研究のために研究費の援助を仰いでいた平福百穂に苦衷を訴えて、了解を願う仕儀になったのであった。

赤彦はこのようにして計画どおりに仕事をすすめることができないままに大正九年をおえることになった。年内に仕上げた万葉集注釈の仕事は、「巻一いくつかの歌に手を付け居り大体完結せしは僅かに雄略天皇の長歌のみに有之これを今度上京の節御目に懸け度存じ居り候これとても未定稿にて慚愧すべきものに候」(同上)と記しているように、巻一の巻頭の長歌一首のみであり、成果はまことに

僅かなものに過ぎなかった。もっともこの長歌は翌大正十年の一月号の『アララギ』に掲載された「雄略天皇御製長歌」であり、のちに『万葉集の鑑賞及び其批評 前編』(大正一四・一一)としてまとめられる研究の端緒となったものである。その点からいうと、一首の注釈といえどもこれをなしおえた意味は必ずしも小さいとはいえない。赤彦は一応研究の緒口をひらくところまではたどりつき得たのであった。

さて機関誌『アララギ』は赤彦の努力によって大正九年を通じて順調に発行され、結社としての『アララギ』の規模は飛躍的に拡大をみた。

赤彦は会員の増加により組織が脆弱化することを慮って、主要同人と相談、従来行なってきた節忌、左千夫忌、子規忌の会合のほか年二三回の東京会員の会合をひろくことをさだめるなど会員組織の強化にも苦心を払った。

会員への直接の指導も怠ることなく、歌会や面会日の際における指導はいうまでもなく、手紙での指導もしばしば行っている。

子飼いの弟子の土田耕平と木曾馬吉(藤沢古実)の活躍がこの年は目立ち、こうした状況のなかで赤彦の力はいっそう強いものになっていった。釈退空が寄せた原稿を『アララギ』に掲載するに不適当なものとして高木今衛に指示して自分の一存で返送させたのは、やがて退空が『アララギ』を去る一因となったが、しかし、赤彦は、多少の摩擦をひきおこしたとしても、今やそれを押し切って自分の意思をとおすだけの自信と力とをそなえてきていたのである。

赤彦はコードモ社の依頼を受けて、この大正九年の十月から、同社の発行になる児童誌『童話』に童話を発表している。童話の創作は、出版社の乞いに応じてはじめたものとみてよいであろうが、し

かし、これ以後赤彦が歿年にいたるまで一時の中断を除いて毎月一篇乃至二篇の童謡を発表し、歿後刊行のものまで含めると童謡集も三冊出版していることをみれば、その創作を終始受動的なものであったとみることは許されないであろう。それで赤彦の童謡については詳しい考察を必要とするが、いまその場ではないので別稿に譲ることとし、ここでは赤彦が十一月号の『童謡』に発表した「石工」の一篇を引いておくにとどめよう。

石工

かつちんかつちん石をきる
眼鏡をかけて石をきる
眼もとを据えて石をきる
汗を流して石をきる

かつちんかつちん石をきる
石より堅い鑿の尖
鑿より強い腕さきで
かつちんかつちん石をきる

かつちんかつちん日が暮れて
火花が見える鑿の尖
鑿の手もとは暗くても
かつちんかつちん石をきる

写実的なところは短歌に通ずるが、働く労働者を題材としている点がとくに注目をひく。赤彦の童謡が当時『赤い鳥』に掲載されて

いた北原白秋や野口雨情の童謡と性格を異にするものであることはこの一篇の作をみても推測されるであろう。

二

大正十年一月号の『アララギ』を前述のように「新年万葉号」として発行した赤彦は、「編輯所便」で次のように記している。——「本号は同人の歌大方顔が揃ひ喜ばしく存じ候。先輩諸氏より御稿を賜り同人の文章も多く集り候。殊に万葉集の研究多く集り候ゆゑ本号を万葉号といはし候。今後更に第二第三の万葉号を出すべき予定に候。」（編輯所便）。ここに新しい年を迎えるに当っての赤彦の意気込みのほどをみる事ができよう。赤彦は漸く完成し得た万葉集巻一巻頭の長歌の注釈をこの号に掲載すると同時に、短歌も「金華山」十首を発表した。これは大正八年の九月に石原純を仙台に訪い、牡鹿半島さきの海中の島金華山に連れ立って遊んだ際の感動を詠んだ作品である。

赤彦はしかしこの年になってもかねて期していたような生活に直ちに入ることは許されなかつた。それというのは、予想外のできごとが相次いでおこってきたからである。

年が明けると一月九日に会員の山本信一が歿した。信一は大正四年の入会で、はじめさほど親しくしてはいたわけではないが、医師である信一に、親交のあった百穂が診療を受けたのを機として赤彦も親しくなり、ことに信一のこじれた結婚問題の解決に力を貸したことから彼の深い信頼を得て特別に親密な交際をする間柄になった。信一が歿すると頼りになる親戚がないため遺族がにわかにな生活面で困窮の状態に陥つたのをみて、赤彦は遺族の救済に力を尽した。三月号の『アララギ』誌上で弔慰金を募集したほか、住宅や信一の妹

の就職のことまで何くれとなく心配して面倒をみている。

百穂の発起になる百穂の郷里秋田県から研修のため長野県内の小学校に教員を派遣する話は前年から出ていたが、この話が右の間に具体化してきた。それで赤彦は、県内の教育界の有力者である三村安治・岡村千馬太・守屋喜七の三人の友人に手紙を送って配慮を依頼し、あるいは百穂と同道、県庁に学務課長を訪ねて、この件が順調に運ぶように斡旋に努めている。また末弟瑞穂が長年世話になってきた北海道のいとこ三溝与八郎が事業に失敗し、後仕末を瑞穂が引き受けることになったについても瑞穂に指示を与えるなど、生家の探原家の家事に関連することについても何かと心を用いている。

このような問題に赤彦がかかわっているなかにおこってきたのが、石原純と原阿佐緒との恋愛事件であった。純は伊藤左千夫の『馬酔木』創刊(明治三〇)当時から根岸派の歌人であり、『アララギ』最古参の同人の一人であった。当時東北帝国大学理学部教授で、アインシュタインの相対性理論の紹介者として知られていた著名な物理学者である。阿佐緒は純よりはるかに遅く大正五年に入会したが、入会以前に『スバル』や『青鞥』に短歌を発表、また、すでに大正二年五月に『涙痕』を、同五年十月に『白木権』を上刊、かなり名を知られていた女流歌人である。赤彦は純を根岸派の先輩として尊重すると同時に、それ以上に学界の権威として尊敬していたし、阿佐緒に対しても自分の弟子の一人として相応の愛着を感じていた。

赤彦が二人の秘密の関係について知ったのは、二月の初旬のことであった。二人のことが純の住む仙台の新聞に醜聞として報ぜられたのを知った赤彦は愕然とした。純は家庭をもっていたし、阿佐緒

も不幸な結婚を解消して束縛のない身であったとはいえず、郷里の宮城原から上京、修学中に教師との間に設けた子供と、その後他の男性と結婚して設けた子供と、二人の子供の母親であった。もし二人の噂が拡まることになれば純の身の大事であることはもとより、『アララギ』の社会的名誉にきずくことは明瞭であった。赤彦はそのことを思っただけで噂の拡がることを極度におそれた。

自分が仙台にでかけて純に会い、関係を解消するよう説得することを一応考えたものの、百穂と相談した結果、圧迫感を与えては反って逆効果となることを危惧して、代りに宇野喜代之介に説得してもらうことにした。さまざまに思い迷って深い混乱に陥った赤彦は、何事も手につかなくなった。『アララギ』の三月号は「氷魚批評号」として発行されたが、二月二十八日に記されたこの号の「編輯所便」にも赤彦は「小生今回は種々の刺戟に接し居り頭纏らず、本便も是にて失敬仕り候。」と記している。

その後、純がただちに妻子と別居して阿佐緒と同棲生活を始めるところまではまだ考えていないらしいことを知ると、純が具体的な行動をとるのをできるだけ引きのばし、その間に反省の機会を与えようと考えた。「どうしても石原さんには真面目な人間として妻子女族血縁友人学問の立場を今暫くの間熟慮してもらひたくアララギ同人の言を重なる文だけでも同棲の実行を一年半延し足をしつかり地面につけて考へて見る工夫を勧め申度存候その上どうしてもと言ふならばもう仕方がないと存候猶今回の事につきアララギ同人には一人も賛成者なしといふ意を石原さんに対し明にして置き度存候その心は原を認めず石原さんをあはれむの意なることを明にしたし斎藤中村二君上京のうへ小生も参上して相談のうへ総括的に斯様な意を石原さんに伝へること一方法かと存候どうも困却してしまひ

候」(大正一〇・三・二六 平福百穂宛書簡)と記している。

純にも手紙を送って反省を促したものの、しかし、一か月の後には、赤彦は努力がすべて無駄であることを知った。「小生等としては心配すべきを心配したるにて自分の心の満足を求むる外無之ともはじめより黙視は出来ず事が希望通りに行かぬとて仕方なしと存候尽し得る丈けは尽したるかと思ひ居り候只淨き人を醜空気の中に沈溺せしめたる事を慨歎仕り候」(大正一〇・四・三〇 平福百穂宛書簡)と、諦めたかのような歎きをもらしている。

万葉集の注釈のようなまとまった時間を必要とする仕事を赤彦が進め得なかつたのはいうまでもあるまい。作歌に力を注ぐこともできなかつた。『アララギ』の二月号と三月号に長崎行の歌を、また三月号に「蓼科山の湯」を発表したが、これらはいずれも前年取材の作品であった。

赤彦の不振は傍目にも明らかで、土田耕平ら身近な弟子たちは不勉強を責めたが、しかし責められても赤彦は事情を明かさなかつた。茂吉や百穂などごく少数の同人とひそかに対策を話合うだけで他の人びとには相談することもなくひたすらに状況の好転を祈って苦しんでいたのである。

赤彦がこのような混沌迷の状態から抜け出ることができたのは、五月になつてのことであつた。五月のある日、ふと心の動くのを覚えた赤彦は、次の歌を詠んだ。

生くるもの

友のことおほはしく心にかかりて年の初めつ頃より歌作らん心も出でずうち過ぎけるに五月のある日ふと心に動くものありて

天つ日はたふとくもあるか大空にいや高くして汎くしあり

天つ日は面をあぐれば面のうへにつねに現しき若光かも

同じ時二階に上り来る小きき足音あり

稚子の心はつねに満ちてあり声をうちあげて笑ふ顔はや

八方に美しい光を放つて照りわたる太陽と邪気のない幼児の笑顔、そこにこれまで見過ごしてきた別の境地を発見して赤彦は感動したのである。その感動は、沈鬱の極にあつただけに、じつに新鮮で、強烈なものであつたと思われる。この歌を詠んだ日を境として赤彦は、新たな境地に出ることができた。

をりをり

五月十九日

桐の花のおつる静かさよ足らひたる眠りよりさめてしまし居にけり

桐の花も散りがたとなれる裏畑に朝一とき下り立ちにけり

五月二十日 雨晴る

日のあるる壇山を見れば柔かくひろがりにけり櫟の若葉

六月七日

朝づく日とほるを見れば茂山のはざまに霽はのこりたるらし

養父の政信(六十八歳)が隠居したあとを嗣いでこの五月の下旬に久保田家の当主となつたことも、赤彦の心境に変化をもたらした要因となつたであろう。

赤彦は作歌の面でこれ以後いちじるしい進歩をみせるようになった。

(梅雨ごろ一)
五月雨のいく日も降りて田の中の湯あみどころに水つかむとす
みどり子の肥え太りたる胸短しただに飲びて湯をたたく居り
湯をあがりてしまらくいこふわが肌の冷えいちじるく梅雨ふけ
にけり

(梅雨ごろ二)

時鳥夜啼きせざるは五月雨のふりつく山の寒きにやあらむ
降りしきる雨の夜はやく子どもらの寝しづまれるはあはれなる
かな

右の四首めの「時鳥——」の歌は、『アララギ二十五年史』で茂吉が大正十年の『アララギ』の傾向について、「材料も余り目だたないやうに、材料をさがして歩くことの意図が余り前景に立たないやうに注意するやうになった。それから主観句でも露骨にならないやうに、余りけばけいしないやうに注意するやうになった。さういう点から見れば、一時新傾向を示してぐんぐん進んだ赤彦君の態度などでもだいたい違つて来てゐるし、その他の諸君のも大体同じやうな傾向に進んでゐるのである。」といい、「一時西洋画などの影響からその感覚も稍特殊なものになりつつあつたが、今度古淡平凡の道に入つて行つたことともなるのである。そしてアララギの歌風は変化といふよりは、深く狭くなつて行つたのである。そしていよいよ完成の域に近づきつつあつたのである。」と記したあとで、この年の作品はこの歌の歌境で代表させることができるかと思うと評したものであつた。

(このごろ)
寂しめる下心さへおのづから虚しくなりて明し暮らしつ

童子が手にもて来つる淡き茶を盃におきて心寂しむ

わが部屋の盃をかへて心すがし昨日も今日も一人居にけり

老境を思わせる右のような作品も漸く詠出されるようになった。

赤彦は籠城主義的な姿勢を依然として崩していなかつたから歌壇に出て他派の歌人と交わることはしなかつたけれども、日常、政治問題には深い関心を払っており、政治に取材した「太平洋会議」のような作品も発表している。

久方のあめりかびとがいくさ船造りつつ白す言のよろしき

国際聯盟を提唱して今関せず

たはやすく口にまうして昨日恥ぢ今日も白さく言のよろしき

公の道を告らさば青雲の明かく空しき心あるべし

綿津見の靛ら白さく己腹を己れ患へず人の腹をうれふ

亜米利加に敢へて物申す己が船をいや断に断ち棄つる心ありや
人をして言はしむるをぞ引綱のもそる言といふ英吉利はいかに

この一連の作は、ワシントン会議に際しての英米の自己本位の態度に憤りを発して詠んだものである。発表当時、歌に適さぬ題材を取り上げた作品として評判が芳しくなかつたけれども、赤彦はみずからの信ずるところを土田耕平に宛てた手紙のなかで次のように披露している。「近頃の所謂新人には国家問題などを気に懸けること流行らぬやうに候へども、小生の如きは衆生の恩、山川草木の恩を有難く思ふが中に自から郷土の恩、君父家族近親の恩を有難く思

ふ心あり、君父や近親郷党や国家の御恩を忘るるやうにては衆生の恩は分り申さざるにやと思はれ申候。自国の正当なる存在問題に対して歌を作すことを小生は恥と思はず。夫れが時勢後れならば時勢が悪いと思ひ居り候。今の人類問題を口にするもの此の辺より省察するの要あり。乃至個人修道を念ずるの輩同じく此の辺に省察する所なくば個人の道も細まり盛まり申すべく存じ候。小生は愛国者を氣取り申さず、国家の存在問題にて正常なる主張をなす事も歌人の一面なることを信ずるのみに候。国家の曲事を難ずるも同じく此の心より出づるものと存じ居り候。」(大正一〇・九・二〇 土田耕平宛書簡)

この頃の赤彦は健康状態も良好で、八月の初旬には次男健次と三男周介を率いて木曾の御嶽山に登っている。明治四十年の咯血以来絶ってきた登山をした背景には、家督を相続したことや成長した子供の姿をみて氣持の持ち方も変ってきたことが考えられよう。

この夏、茂吉が欧州留学を目前に控えて、身体の養生のため富士見高原の原の茶屋に滞在した。赤彦は茂吉を訪い、『アララギ』の今後のことについて話合った。石原純と原阿佐緒の恋愛問題は、その後さらに大きくなり、七月の末には純が大学総長のもとに辞表を提出したことが東京の新聞にも報道されていたし、この頃純も富士見に来て駅近くの旅館に滞在して著述に従っていたので、二人のことも話題となったが、この問題については見切りをつけていた赤彦は、もはや関与しないことにした。

八月二十一日に上諏訪の地藏寺で歌会がひらかれたので参会、続いて九月三日、同地の温泉寺にひらかれた茂吉の送別会に出席した。この送別歌会には百穂・憲吉も参加したので、歌会のあと富士見の小川平吉の別荘帰去来荘に四人で泊り、茂吉を囲んで歓談、送

別の記念とした。

赤彦はアルスの企画に應じて中村憲吉との互選による『中村憲吉選集』と『島木赤彦選集』を九月に刊行したのに続いて十月には自分の選歌による『伊藤左千夫選集』を出版するなど好調を持続していたが、この間に茂吉の外遊が迫ってきたので、『アララギ』の編集勢を強化することにし、十一月号から土田耕平を選者に加えた。耕平は年若くはあったが作歌の力量において若手中群を抜いていたし、四月に七年ぶりで伊豆の大島から戻って以来、盛夏の一時を除いて発行所に寄寓しており、編集の事務を担当する上の便もあつたから、この起用については、何びとも異存のないところであつたろう。麴町区下六番町の佐々木方から七月のはじめ頃に東京市外代々木山谷(豊多摩郡代々幡町)二七一番地の井上方に移していた『アララギ』の発行所を近所の代々木山谷三一六番地にさらに移転したのも、この頃(十月)のことであつた。

茂吉が故国をあとにして外遊の途に上つたのは、十月二十七日であつた。病後の身で、妻子をのこして速く欧州に出発する茂吉を横浜港に見送り、強い感動を覚えると同時に、赤彦は責任が重く自分の上にかかってくるのを感じて身の引きしまる思いがした。

(斎藤茂吉西欧に向ふ)

ひとつ日のもとにありとし思ひつついく年久にわれはたのまむ
いたづきのなほのこる君を海山のはたてにおきて思はむものか
病ひにも堪へつつ君は行くらめど堪へられぬやもそを思ふもの
は

茂吉の外遊は赤彦にとってまさに大きなできごとであつた。茂吉

は長い間長崎にあって『アララギ』の経営に直接関与することは少なかったけれども、赤彦はこれまで『アララギ』の重要な問題はすべて茂吉に相談して決めてきていた。大正中期以降『アララギ』が歌壇の中心的な勢力となり、発展してきたのも茂吉の力に負うところ決して少なくなかった。その茂吉は、前年「短歌に於ける写生の説」と「写生の説」別記を『アララギ』に連載、写生説の完成につとめており、歌壇との交渉を絶ち仕事に専念しようとしながら実際は何ほどのこともなし得なかつた赤彦に比べると、より大きな仕事をのこしていたといつてよい。茂吉の外遊が赤彦に影響を与えたのは当然である。

赤彦の『アララギ』における地位は茂吉の外遊を境として、以後、格段にゆるぎないものになっていく。茂吉は心強い味方であつたと同時に手ごわい競争相手であつたが、その茂吉の去つたことが赤彦の勢力を強めることになつたのである。すなわち『アララギ』の発行所は赤彦直門の弟子たちによつて固められ、古泉千樞・釈超空などは発行所から次第に遠ざかつていった。ことに、赤彦とそりの合わなかつた千樞は、かつて原阿佐緒と不倫の關係を結んだことが明らかになつてきていた上に、純と阿佐緒との恋愛事件に關しても阿佐緒弁護の意見を發表し、『アララギ』の統一を乱す者として赤彦の強い不満を買つていたことから、いちじるしく立場を悪くし、発言力を失ふことになつた。こうして赤彦体制とも呼ぶべきものが『アララギ』のなかにでき上ることになるのである。

一方、赤彦自身の活動も活潑化する。赤彦は作歌の面で相次いで秀作を發表、作風も一段と円熟味を加えるとともに、万葉集の研究も漸く進捗をみ、その成果の一部を『万葉集叢書』に収めて上刊するにいたるのである。

以上、大正九年六月『氷魚』を刊行してから十年末頃までのほぼ一年半の間における赤彦の行迹について略述してきた。この時期の赤彦については、伝記上不明な点が多いにかかわらず、これを対象としてとりあげた論稿がまだみられないからである。

赤彦はこの間、上述のように相つぐ障害に遭つてまことに遅々たる歩みを続けねばならなかつた。作歌と万葉集の研究とに全力を傾注しようとするが、停滯を余儀なくされたのである。しかし赤彦は、身辺多事をきわめつつも会員の急増や石原事件などのむずかしい問題にもよく対処し得て、この間に『アララギ』の組織をより強固なものに作りあげていたのである。赤彦が突り多い晩年を送り得たのも、この期間に基盤を整えておいたからにはかならない。この時期の赤彦を考えるには、作歌や万葉集研究の面での活動の停滯と同時に、この事実にも留意する必要があるであらう。

大正十一年以後の赤彦は、こうした基盤の上になつて、新たな活動を展開することになる。それら晩年の赤彦についてはやや詳しい記述が必要であり、稿を改めて述べることにしたい。